

多元的古代研究会・九州の会		年日
代表幹事 兼川 晋	行 67	
事務局 福岡市西区壱岐町地一二〇一二	91	
〒819 鮎811-3284	発9月	
常任幹事 灰塚 照明	13	
N O . 6 3		

南と北の縄文土器情報

一月例会（二十日）の報告

一月の例会は二十日（土）、早良市民ホールで視聴覚教室が確保できたため、久しぶりに縄文土器に関するビデオを一本見ることにしました。一本はNHKの「最新縄文学」。もう一本は東日本放送の「縄文の謎を解く—東北黄金時代—」です。方や南九州、方や東北から沿海州の情報でしたが、文献史学圏外の話とあって視聴後の討論は、やや盛り上がりに欠ける憾みがありました。

【最新縄文学】

このビデオの梗概は六二頁に紹介済みなので省略します。

【縄文の謎を解く 東北黄金時代】

これは一昨年、日本とロシアの共同調査団が沿海州のウスチノフカで縄文土器を発掘した時の同行ドキュメンタリーです。

線を見せながらも整然と見届けられる現場のアップショットで、よく捉

韓国の鏡・剣・玉について

二月例会（十七日）の報告

二月の例会は十七日（土）、早良市民センターで「韓国の鏡・剣・玉について」という兼川代表幹事のレポートでした。鏡・剣・玉のいわゆる3点セットを出土した韓国の古墳は、今までニュースでは三カ所が紹介されました。レポーターはこのほかに銅剣と玉類、銅劍と銅鏡、銅鏡と玉類の2点セットを出土した遺跡や、鏡または剣を含む組み合わせの遺跡を列挙しましたが、話は途中から倭人の分布の方に逸れ、倭人は遠東半島まで分布していたかも知れないという話になつて、矢印の話は煮詰めるまで進みませんでした。

えていたのが印象的でした。

最終的には、ロシア側の土器の権威者が、それを日本の縄文土器と同質のものだと断定、決着しましたが、もし、この権威者の判定が逆に出いたらどういうことになるのか。考えると、学問も恐ろしいもの

です。
フリートーキングはいまひとつ活発さに欠け、兼川代表が、黒板いっぱいに描いた一万年の横軸に火山噴火の印を付けて、上段は東の縄文、下段は西の縄文、いつまでその特徴が違っていたか、いつから共通の特徴を持つようになったか、そこにアカホヤとの関連は指摘できないか、バルビディアへの伝播は最後の爆発被害周辺部縄文人のボートビープルがもたらしたものではないか、と締めくくりました。

遺跡の編年問題があります。単

純にいうと、おおむね、韓国の方が古いと発表されています。では、そのまま、3点セット埋葬の儀礼は韓国から渡来してきたのか。こう考

えるためには、現在の編年の正当性を立証しなければなりませんが、現に古田説は、須玖岡本の雙鳳鏡をめぐって、ほとんど定説化している学界の編年に修正を求めているのです。

須玖岡本を一世紀と見たのは富岡謙蔵と梅原末治ですが、晩年、梅原末治が、それを自ら三世紀前半以降に修正したとき、一世紀説はすでに定説化していた、というあの話です。

韓国の編年基準も調べてみる必要があり、だから簡単にいきません。レポーターはこのほかに銅剣と玉類、銅劍と銅鏡、銅鏡と玉類の2点セットを出土した遺跡や、鏡または剣を含む組み合わせの遺跡を列挙しましたが、話は途中から倭人の分布の方に逸れ、倭人は遠東半島まで分布していたかも知れないという話になつて、矢印の話は煮詰めるまで進みませんでした。

- ①扶余合松里遺跡
③唐津素素里遺跡

これだけ資料が揃うと、前方後円墳と同様に一考してみる必要があります。半島と列島を結ぶ矢印などの方向につけるか、慎重を要する問題でしょう。

福岡県に集中し、①吉武高木②三雲異なる色相の地層がうねるような曲

一月の例会は十七日（土）、早良市民センターで「韓国の鏡・剣・玉について」という兼川代表幹事のレポートでした。鏡・剣・玉のいわゆる3点セットを出土した韓国の古墳は、今までニュースでは三カ所が紹介されました。レポーターが調べたところによると、日本では九州の

福岡県に集中し、①吉武高木②三雲

③須玖岡本④井原⑤平原の五カ所に對して、韓国は八カ所もあるそうです。次の通りです。
①金海良洞里遺跡（紹介済み）
②大田槐亭洞遺跡（紹介済み）
③咸平草浦里遺跡（紹介済み）
④新昌南城里遺跡
⑤扶余蓮花里遺跡
⑥礼山東西里遺跡

韓国の編年基準も調べてみる必要があり、だから簡単にいきません。レポーターはこのほかに銅剣と玉類、銅劍と銅鏡、銅鏡と玉類の2点セットを出土した遺跡や、鏡または剣を含む組み合わせの遺跡を列挙しましたが、話は途中から倭人の分布の方に逸れ、倭人は遠東半島まで分布していたかも知れないという話になつて、矢印の話は煮詰めるまで進みませんでした。

古代学カンビ「ころノート（十六）

中小路駿逸

私は、どこから、何に向かつて、古代にかかる学にはいりこんでいたのであろうか。—そぞら自らに問うてみると、ごくはじめのころに「ここからそれははじまつたのだつた」といえる「点」、「基点」といつていいものが、複数あつたのに気づきます。それらの特定の場所にあつたものが、それぞれ、ある矢印のようなものをそなえていて、その矢印が決してバラバラな方向を指したりはせず、その「基点群」が特定の方向を指し示し、その特定の方向に私を進ませ、現在置かれている地点にまで導いてきたのだった。—と思い起されるのです。

それらの場所でそれぞれ何が起こつたのかを折にふれて確認しておくのは、これから進み方を決めるためにも必要不可欠なこと。そこに間違いがあつたとわかれば、「最初のボタンからかけなおす」作業をはじめなければならず、その作業が終わつてこれでよしとなつてはじめてあらためてどう進めばよいか、つまり矢印はほんとはどちらを向いているのかを確かめる、という順序を踏ま

なければならぬからです。

仕事の流れの上からいつても、ちようどいい折りと思われますので、ここで確認しておくことにいたします。

『倭人伝』の版本には「邪馬臺國」と印刷されていた

本文を改訂するためには、根拠がいるのである。改訂せずに読むには、本文にそある（あるいは、諸本異同なし）という以外、べつだん根拠も論証もいらないはずである。ではこの“改訂不要論”は、何だ？“本文どおりでよい”をワザワザ論証したのか？従来の、あるいは当初の、“改訂の根拠”的無効が、論証されたのではないか？

これはひょっとすると、たいへんなことなのかも知れぬ。

想念の帰結は、ハッキリしている。とにかく、その本を、じつさいに読まなければならない、ということだ。

そのとき私の心に何が起つたのかを、私は「市民の古代」第六集（一八八四刊）所載の「古田論証との出会い」（のち「季節」第十二号へ一九八八刊）に、次のように書いています。

しばらく、ものがいえなかつた。

想念が、あわだしく心中を走る。

『三国志』の「邪馬臺國」と

いうのが、“改訂された字面”であ

ることを、おまえはなぜ気にとめなかつたのか？

その“改訂”には、どんな理由があつたのか？

カンビ「ころノート」発想の根元
「改訂の根拠は何か」

『三国志』の『倭人伝』を含む本文（南宋以後の木版本が伝わる）には「邪馬臺（本により「一」）國」とあることも、やがて知りました。「諸本異同なし」に該当します。

心の動き、それは事実（それ自身と矛盾する事実を含まない、すなわち別に何も伏せられていない事実）であると同時に、私の心にとつては必然の動きだった。つまり、そのときも今も、私の心は一貫して、これと同じ動きをしていて、私はそれが正しいもの、物事を正確にとらえ、正當に判断するにはこうするしかないと考えつづけているのです。

心のこの動き、あるいは思考のすじみちの選択のしかた、これには力などどころがあるのであります。

それは、つまり、「臺」とあるのがなぜ正しいかではなく、「臺」はなぜマチガイとされ、なぜ「臺」にとりかえてうけとることにされたのか、その「改訂の理由」、それも「本来の理由」をまず問うている、というところ。

こここのところ、とり違えてもらつては困りますよ。「なぜ『臺』に変えるのか、なぜ『臺』が正しいと考えるのか」、「その考えはもともとどこから生まれたのか」、そこが力

ところであります。

なぜだかわかりですか。文献のなかの文字を改訂するときには根拠が必要であり、改訂しないためには「そこにはともかくその字になつてゐる」とか「その文献のその箇所については、現存する諸本において異同はない」とかいう以外に、べつだん論証を要しないというのが、普通の、当然の、当たり前の手順なのだからです。

「臺」を「臺」になおすにはそれなりの理由があつた。その理由とは?

でも、今の場合、現実には、とうの昔から日本のこの方面の学問の世界では「臺」は「臺」が正しいといふことになって、このやり方がそのまま通用し、今も日本古代史学の世界（あるいはムラ）のなかでは、絶対的多数のあいだで通用している。

そして大事なこと。この「改訂」には、本来、強力な根拠・理由といふものが、それが正しいのか間違つてゐるのか、学問の世界で通用するかしないかは別として、チャンとあつたのだということ、および、その本來の根拠・理由だけは、現在、伏せられていて、本來の根拠でなく本來の根拠に付帯していたものとか、あとから考へ出してとつてつけられたものとか（具体的な例はのちに申します）が、さも根拠として有効で

あるかのことく、さらには本来それこそが改訂の根拠であつたかのことくにさえ、言い立てられつづけていふのだ、ということ。

「一元通念」こそ本来の根拠

「臺」から「臺」へのこの改訂には、本来、根拠となるものがあつた。そのことは古田氏がすでに指摘しておられるところ。すなわち研究史をさかのぼつて松下見林の『異称日本伝』に見られる改訂の理路が示しているものこそ、それにはかならぬ。その理路は次のとくです。

『日本書紀』は正しい。

それによれば、日本列島上に最高

の王権と称すべき権力はもともと
（したがつて『三國志』の扱つてい
る時代においても）一つしかなく、

その王権の所在地はヤマトであった。

「一元通念」は『日本書紀』に合
わない

したがつて学問上無効なものであること、その有史以来最初の指摘が古田論証なのだった。古田論証といふ指のさし示すもの、それは「一元通念」の無効という一点にほかならない。この一事をはずしたり伏せたりしてモノをいうのは、専門家であろうとアマチュアであろうと、無知行うもの。私にはそのように考えられますね。

ゆえに『三国志』に述べられている倭の権力の中心たる女王国の名については、ヤマトと読める文字で表記されているものがあれば、それを妥当とする。

したがつて『後漢書』の「邪馬臺國」はそれに該当し、『三國志』の「邪馬臺國」は該当しない。

そしてこの場合のカンどころ、そ

のいう例の「一元通念」だった。言いかえればこの改訂こそ、「一元通念」という「冰山」の、ヤマタイコク問題の表面に露呈された「一角」なのだった。

古書 天 尊 書 房



〒810 福岡市中央区六本松2丁目2-9 (大通りバス停前)
TEL (092) 731-0516

〒812 福岡市博多区博多駅中央街1の1
博多駅のデパート 博多井筒屋 7階古書コーナー¹
TEL (092) 431-1141

郷土資料、文学書、美術書の売買。古書目録も隨時発行致しております。「多元的古代」会員の方には、特別価格にて御奉仕致します。

人麻呂のあしあと

灰塚 照明

昨年、六月の下旬、会員A氏（匿名希望）からお電話。

山口県の山陰本線人丸駅の近くに柿本人麻呂を祀るお宮があり、人麻呂の歌と、それにちなんで詠んだという宗祇法師の歌も残っています。内容は、由緒書きと説明板で幾分違うのですが……ご存知でしょうか。

博多区住吉神社の末社・人丸神社と宗像市東郷の人丸神社にはお詣りしたが、山口県については全く知らない私である。早速お手持ちの資料をお送りいただいた。

この機会に、かつてノートしておいた福岡県内の人丸神社関係のことも合わせて報告したい。

まず、山口の人丸神社から。

一、「八幡人丸神社略記 附属 古典樹苑」

神社名 八幡人丸神社

鎮座地 山口県大津郡油谷町大字新別名三五番地

御祭神 応神天皇（十五代）

仲哀天皇（十四代）
仁德天皇（十六代）

柿本人麻呂

外・境内・外社合祀

由緒 新別名弓絃葉山に鎮座の八幡宮と当地三佐崎山に鎮座の人

丸神社を合祀（明治四十年十二

月）し、即日当神社社殿に移し

現神社名に改称する。御神徳は

農・商・工・水産業繁榮、学業

成就、開運厄除、延命長寿、交

通安全、縁結び、火除けの神々

として遠近の人々に信仰され親

しまっている。神社は小高い丘

陵にあり、油谷の海を眼下に眺

め、遠く角島の一角を望むこと

ができる。境内には万葉集をはじめて

古典に関する木草を植栽

している。

旧八幡宮由緒 天平宝字年中（四七代淳仁天皇の御代）油谷町字掛淵なる漁夫の夢に、牛に乗った八幡大神と称するお姿が示現したので、油谷より奉遷し地域鎮護として弓絃葉山に主祭神・応神天皇配祀神・仲哀天皇・仁德天皇を奉祀した。

旧人丸神社由緒 柿本人麻呂朝臣在世中石見国（島根県）より九州・奈良方面への往還のみぎりこの地の風光を痛く賞し詠まれたと言い伝えられた歌がある。

向津のおくの入江のさざ浪にのりかかるあまの袖は漏れつて逝去後、郷人その威徳を追慕し、祠を建立して奉祀する（年代未詳）。降つて飯尾宗祇（室

年寂）右の歌に因んで詠めるという。

むかふ津のりかく海士の袖に

また思はずねらすわが旅衣

この歌という色紙當神社に藏

す。文明十二年六月宗祇九州に

赴く。古来旧公家、旧藩主及び

遠近庶民の崇敬厚く、石見国高

津・播磨國明石の柿本人麻呂社と共

に日本三社と称する。

社殿・古典樹苑・宝物（略）

遺跡 「古丸丸」といい、往昔の

人丸社地と伝う（東西四百米）。

「七池」当神社社外に七池が

ある。連歌鏡池・乳の池・御手

洗池・鐘の池ほか三池があり、

連歌鏡池は清水が湧き、歌碑も

ある。乳の池は乳乞いの池とし

て、この水を汲みつて、当神

社境内地にある乳水掛けの石に

かけて乳を乞えばかなうという

ことから子育ての石ともいう。

（以下略）

右由緒書きとA氏撮影による「説明板」（木製・墨書）の写真とを対比してみた。

1 行路について

由緒書きは「石見国より九州・

奈良方面」。説明板は「岩見国か

ら九州へ」となっている。説明板

は単なる省略記事か、それとも岩見・九州という「限定行路」なの

か。いずれとも判断しかねる。

2 伝・人麻呂の歌について

①由緒書きは「向津の」、説明板

は「むかつぐの」、宗祇は「む

かふつの」である。地図を開け

ば、油谷湾の北に、向津具上、

向津具下がある。「むかつぐ

と「むかふつ」は時代による地

名の変化であろうか。

②由緒書きは「漏れつつ」、説明

板は「ぬれつつ」。これは前者

のミスプリントと思われる。

右資料は、『万葉集』に見えない

和歌が人麻呂作と伝承されること自

体、重要なが、さらに万葉仮名

の原文または写本でもあれば幸いこ

れに過ぎるものはない。同時にその

方面的専門家による伝承そのものの

検証も必要であろう。

ここでの人麻呂は、岩見国を原点

として行動したニュアンスである。

一方、柿本人麻呂の「伯耆

国（鳥取県西部）に閑居」したとい

う記事とあわせて、今後、九州、山

口、島根、鳥取各県の広範囲にわた

る研究調査を進める必要があろう。

今年は是非とも、油谷町人丸の現地

を訪ねたいものである。

1 村社 和歌神社

二、福岡県内の人麻呂神社

厳密には三カ所、類推される宗像神社を含めば六カ所に祭られている

ようである。

宗像郡東郷町大字大井字ワ

ダンブリ長者伝説と九州年号

古賀 達也

ニュース六二号にて、灰塚照明氏が東北のダンブリ長者伝説を紹介された。私もかねてより同伝説に関心を抱いていたが、それは同伝説が九州年号「善記」を伴って伝えられているからであった。

灰塚氏の紹介された「かわら版・臯月号」には継体天皇一七年とあるが、現地伝承では更に詳しく「継体天皇の善記一年」とされることが多い（ただし善記は前龜・善喜などの字で記されたケースがある）。こうした状況は同伝説が九州王朝の影響下で成立した可能性を伺わせる。もちろん、後代において、九州年号で記された年代記類を参考にして「善記一年」が伝承に付加された可能性もあり、いずれとも判断しにくい。

北奥において九州年号が使用されている例として、私は五所川原市の三橋家文書（善記四年）を以前紹介したが、このダンブリ長者伝説に関する善記は青森県南部市的小豆沢大日堂縁起にも見られ、北奥ではこの善記のみが九州年号として採集されている。山形県・福島県まで下がると羽黒修驗宗との関連で他の九州年号も散見される。

さて、灰塚稿では同伝説を東北王朝との関連で考察されており、卓見というべきであるが、九州年号との関連からすると、同伝説に見えることでも可能ではあるまいか。『仙台金石志』によれば鷲口に「善喜一年三月日」という銘文があつたとされ、これが同時代史料であれば九州年号の善記が実用されていた証拠となり、ダンブリ長者伝承も九州王朝との関連が深まつてこよう。

また、江戸期の史料として高山彦九郎がダンブリ長者伝説を記しており、同地方の福宗山中大寺（万若村）、長久山仁龍寺（神浦名香子村）、養老山事徳寺（小豆沢村）の三寺は継体天皇前龜年中にダンブリ長者による建立と紹介している。そうすると、通説でいう仏教伝来（五三八年）よりも早い仏寺建立となり、これも九州王朝との関連を思われるのである。

その一方で、鹿角地方が「京の都」と呼ばれていた傍証もあり、そこの場合、灰塚説（東北王朝の都）が有力となる。『袖中抄』に「けふ（京）の細布とは、みちのおくに出くる幅せまき布也」、『奥義抄』にも「けふの細布とは、見ちの国のみの郡より出くる布なり」と見え、これが鹿角地方とされている。

このようにダンブリ長者伝説は興味深い問題を含んでおり、これに目をつけられ多元的史観による解釈を試みられた灰塚稿は貴重である。同地には峰を隔てて複数の川の源が集中し、それらの川が太平洋や日本海に注いでいることを考えると、地勢的にも古代より特別な地域であることを疑えない。この面からもダンブリ長者伝説は東北古代史の重要な研究テーマと思われるのである。

高句麗の地域名に「ラ」

兼川 晋

をつけられ多元的史観による解釈を試みられた灰塚稿は貴重である。同地には峰を隔てて複数の川の源が集中し、それらの川が太平洋や日本海に注いでいることを考えると、地勢的にも古代より特別な地域であることを疑えない。この面からもダンブリ長者伝説は東北古代史の重要な研究テーマと思われるのである。

郡時為臨屯高句麗称河西良一云何瑟羅州

「渕州はもと穢國なり。漢の武帝、將を遣して右渠を討ち、四郡を定めし時、臨屯となす。高句麗は河西良と稱す。一に何瑟羅州とも云う。」

河西良はカサラ、何瑟羅州はカシラ州と読む。いずれも、渕州、本穢國、臨屯、高句麗領内の地域名。

正月、屠蘇を飲みながら読んだ山形明郷著『邪馬台國論争終結宣言』から、孫引きだから、中世の史書だからと思って見もしなかった『高麗史』にも、一度、図書館に出かけて眼を通さなければと思つてゐる。

『邪馬台國論争終結宣言』は途中まで面白い本だが、平壤から出土した数々の樂浪の文字入り遺物に何の説明もせずに、漢の四郡をすべて遼寧に押し込め、結論として邪馬台國は遼東半島か、拡大しても現朝鮮の平安北道辺りに求めるべきである、といふのだからお話にならない。

図書紹介

「倭國王のふるさと 火ノ国山門」

平野雅曠著 下田印刷

熊本の平野さんの昭和五十八年以降最近までの史稿をあつめた三冊目の古代史論文集。なかなか好評です。既刊に『九州王朝の周辺』『九州年号の証言』。自費出版のため、申し込みは事務局へ。定価二〇〇〇円

古代史スクランプ帳

灰塚 照明

国内初！住居跡から弥生の銅戈

北九州市小倉南区の重留遺跡（弥生後期）で祭器の広形銅戈が竪穴住居跡に埋められた形で見つかった。埋め型が丁寧などから、二日発表した市教育文化事業団埋蔵文化財調査室は、この住居が常設の祭事遺跡だった可能性があると見ていい。

住居から広形銅戈が出土したのは国内ではじめて。祭器を埋める儀式「埋納」の跡と見ている。埋納の確認例は集落はずれの谷や、集落内でも住居外が一般的で、住居内は珍しい。

出土した銅戈は全長八一センチ、幅二三センチ。埋納用としては典型的なサイズ。埋納の穴は住居の南側の壁沿いにあり、縦約一一五センチ、横約五〇センチ、深さ約二〇センチ。戈は地面と平行だった。穴の中の土は三層に分かれ、戈の上には円く固めた粘土が積んであつたことから、戈を数回掘り出したり埋め戻したりしたと見られる。

一方、住居跡は縦約八メートル、横約六メートルと、普通（約五メートル四方）より一回り大きく、住居

活より火力が強かつたことを示しており、火が祭事に使われていたかも知れない。しかし、祭事用でありながら、普段から人が住んでいたようである」として、宗教施設であつたとしても、現在の神社とは性格は違つていたと見ている。

（九六・二・三 毎日）

国内最古の文字・三重片部遺跡

三重県一志郡嬉野町中川の片部遺跡から出土した土器を調べていた検討委員会（委員長・水野正好・奈良大学長）は二十日、国内で書かれたものとしては現存する最古となる四世紀前半の文字を土器の表面に確認した、と発表した。材質は墨と見られ、同委員会は漢字の「田」と読んでいる。これまで最古の文字とされ

るものと確認されていることから、文字が土器製作と同じ時期に書かれたものと断定。また同委員会は、現場が集落遺跡であることから、四世紀前半に畿内を中心に広範囲に文字が使われていた可能性を示唆。四世紀前半が日本の国家形態や文化がこれまでの定説より進んでいたことを示し、古代国家成立研究にも大きな影響を与える可能性があるという。

（九六・一・二一 每日）

国家成立論争に一石

片部遺跡で発見されたわずか一字の「日本最古の文字」は、日本の古代国家の黎明期について、無限の想像をかき立てる。

奈良大の研究グループを中心とする検討委員会では、文字を「中」や

調査（昨年九月）で古墳時代（四世紀前半）と見られる流水路、堰などを発掘。流水路の底から約四〇点の土師器などを発見した。文字が発見されたのは、このうち土師器「小型丸底壺」（直径一二・六センチ、高さ七・三センチ）の口部分の破片。やや斜めで、字の下の横線が切れた形ながら、同委員会は漢字の「田」（約二・五センチ四方）と読んでおり、土器の所有者か所有組織の名前の一端と見ている。

同委員会は、付近で発見される他の土器類もすべて四世紀前半のものと確認されていることから、文字が土器製作と同じ時期に書かれたものと断定。また同委員会は、現場が集落遺跡であることから、四世紀前半に畿内を中心に広範囲に文字が使われていた可能性を示唆。四世紀前半が日本の国家形態や文化がこれまでの定説より進んでいたことを示し、古代国家成立研究にも大きな影響を与える可能性があるという。

委員会によると「筆者」として考えられるのは中国や朝鮮からの渡来人系の人。とすれば、遺跡近くに初期大和朝廷の重要な港があり、港の管理者としてこれらの人々が派遣されていた四世紀前半に、すでに大和朝廷の初期国家形態が整備されつたなどとも推定される。

さらにこれが墨書きであれば、墨書きの歴史を一気に約三世紀修正することになる。

西山要一教授によると、文字の材質としては、墨、マンガン、鉄が考えられる。土器の字の部分と字のない部分の成分を調べた結果、炭素の検出量に明確な差はなかつた。が、マンガン、鉄も普通の粘土レベル以上に検出されなかつたことから「消去法で墨の可能性が強い」（西山教授）とした。

同委員会では、墨書きであることと「虫」などと読む可能性についても検討した上で「田」と見ている。これまで国内で書かれた最古の文字は、五世紀の稻荷台古墳（千葉県市原市）や稻荷山古墳（埼玉県行田市）の鉄劍銘。日本書紀などの記述では、応神天皇の時代（四世紀後半から五世紀初め頃）に百濟の博士王仁が漢字を伝えたとされる。いずれにせよ、最古の文字の歴史に約一世紀の修正を迫るが、そのほか、日本の古代国家成立論争にも一石を投じる可能性があるというのだ。

「虫」などと読む可能性についても検討した上で「田」と見ている。

の科学的証明を今後も続ける方針という。たった一つの文字から古代国と家成立史までには遠大な距離があり、今後の論争を待たなければならぬが、今回の発見で古代史研究が新たな段階に入ったことは間違いない。

(九六・一・二二 毎日)

△記事を読んだ感想△

苦虫を噛みつぶす思いだ。

本件もまた学界・報道関係が束になつて一元史観で解釈するというパターンを繰り返している。彼らは大和王權に先行する倭國の文字文明には一言も言及しない。

会員諸氏は、古田武彦著『古代は

輝いていた』『風土記』にいた卑弥呼』(朝日文庫)一八二頁「倭國の文字受容史」を再読されたい。結論

は次の四点になる。

①倭使は皆「大夫」(周の官職名)を称していた。

②志賀島の金印(五七年)。

③室見川の銘版(一二五年)。

④卑弥呼の上表(四〇年)。

右の①②は、倭人の、少なくとも「読解能力」、③④は「作文能力」を示す記録である。

惑わされてはならない。

通信』(同四段)三行の高良大井(六一号五頁)二段

お詫び訂正

○今年は役員改選の年です。その今年になって、会員のご家族や会員ご本人の計報が受けざまに届き、二月の役員会はショックを受けました。市吉幹事のお母さん、高橋幹事の奥

高良大井、六頁一段一五行の(三六七)年(三六九)年、同一九行の新たな段階に入つたことは間違いない。

(九六・一・二二 每日)

一六行の倭人伝(韓伝)、同三二行の『古事記通信』(古事記通信)、同二行の一文章内に多量のミスプリントがありましたことを深くお詫びいたしま

す。

例会案内

日時 四月二十日(土)

十三時半～十六時半

会場 早良市民センター3F
テーマ「倭人伝の道を歩く」の総括担当 兼川晋代表幹事

五月は特別例会になりました。

日時 五月十九日(日)
十三時半～十六時半
会場 福岡市立博物館講堂
演題 韓半島の三種の神器など
講師 古田武彦先生

○事務局には、佐野さん、山本さん、深津さん、白名さん、室伏さんからの原稿が未発表のままであります。これらは紙面の都合やタイミングの関係で繰り越されたものです。今後、掲載されるものもありますが、割愛されることはあります。あしからずご理解の上、今後ともよろしく。

○多元史観に立つ私たち会員に耳よりな話を一つ。秋田書房の月刊誌『歴史の旅』四月号(二月二十四日発売)に荒金卓也さんの「倭の五王」に関する文章が載っています。編集者からは、特に「九州王朝説の立場から」と指定されたそうです。

○和田家文書寛政本基金カンパの際にはご協力有り難うございました。その後、事情が変わり、不要になりましたので、寄せられた七万八千円が利息と合わせて古田先生から返金されました。事務局は四二名のご協力いただいた方々に、ただいまお返ししています(現在進行中)。

○五月は御所ヶ谷神籠石を中心とした見学会の予定でバスまで手配済みでしたが、昭和薬科大学を退任された古田先生が十六日に福岡歯科大学での講演のため来福されるそうで、急遽、特別例会に切り替えました。

あしからず、ご了承のほど。

事務局便り



あなたにあげたい健康があふ!

バイオの力—野生果実熟成食品

萬田酵素

お問い合わせ・お申込みは 092-843-1012(代)

九州地区代理店
株式会社 愛華

福岡市城南区飯倉1-6-30 TEL 814-01